

目次

序章 多様性の時代の正義

バイセクシュアルのスーパーマン？

「多様性」への反動としての「ザ・ボーイズ」シリーズ

正義はどこへ行く

11

第一章 法の外のヒーローたち

ヒーロー物語の「型」と「技」

英雄物語の「型」をめぐる諸説

円環構造と貴種流離譚はなぜ重要か

『ダークナイト』の衝撃

アメリカ的正義の本道としての『真昼の決闘』

21

『リバティ・バランスを射った男』における法と秩序と暴力
二〇世紀アメリカの孤立した正義
ポピュリズムの現在地

第二章 二つのアメリカと現代のテレマコス

MCUはなぜ『アイアンマン』から始まったのか

二一世紀アメリカの新・新孤立主義

GAF A的な富とヒーロー

新しい資本主義の精神

現代のテレマコスたち

第三章 トランプ時代の「お隣のヒーロー」

トランプ時代と新しい資本主義の否定？

ポストトウルースと「スパイダーマン」シリーズ

第四章

多様性の時代に「悪」はどこにいるのか？

『スパイダーマン…ファー・フロム・ホーム』の主題としてのフェイク

『ジョーカー』とポピュリズムの両義性

「ダークナイト」三部作と左派ポピュリズム⇨神的暴力

「客観的な事実」という概念が世界から消えつつある」

『マトリックス』とレッド・ピル

『マトリックスレボリューションズ』の反革命

映画というフェイク

ポストトゥルースと共に生きる『スパイダーマン…ノー・ウェイ・ホーム』

「ブラックパンサー」シリーズと多文化主義

正義／悪の喪失とニヒリズム

環境的限界と「悪」

『ドン・チードルのキャプテン・プラネット』とエコテロリスト・ヒーロー

『エターナルズ』と自然と計画

『風の谷のナウシカ』と自然と人工の脱構築

多文化主義とニヒリステイックな党派主義の間で

サノスの豹変

第五章

「オレはまだまだやれる！」——中年ヒーローの分かれ道——

還暦をぶっとばせ——『トップガン マーヴェリック』

一抹の不安と『オビ・ワン・ケノービ』への失望

オビ・ワンの従属的男性性

なぜ『トップガン マーヴェリック』は成立したか？

第六章

障害、加齢とスーパーヒーロー——

完全なる身体の終わり

ユダヤ人、黒人、多文化主義

第七章

日本のヒーローの昔と今

「X-MEN」シリーズと能力・個性としての障害

障害の社会モデル、『僕のヒーローアカデミア』、新自由主義

新たな健全者主義とスーパークリップ、そしてポスト障害の世界

『LOGAN／ローガン』とポストフェミニズムとその向こう側

多様性、ニヒリズム、資本主義

日本のヒーロー物語と「多様性」

リトル・ピープルの時代

官僚制から陰謀論へ——「ウルトラマン」と「仮面ライダー」

科学特捜隊Ⅱ自衛隊

「仮面ライダー」シリーズ、「水戸黄門」から「必殺仕事人」へ

新自由主義的感性と「正義」の行方

第八章 正義のパロディとニヒリズムとの戦い

「ウルトラマンの人」としての庵野秀明

残されたのはパロディのみ

『シン・エヴァンゲリオン劇場版』とニヒリズムの超克

第九章 デスゲームと「市場」という正義、そしてケアの倫理へ

『仮面ライダー龍騎』における、デスゲームと市場という正義

ゼロサムゲームと「平らな競技場」

企業ヒーローの意味

デスゲームのジェンダー、そしてケアの倫理

第十章 ポストフェミニズムと新たな「ヒーロー」

『ふたりはプリキュア』という革命

『HUGっと！プリキュア』の「敵」

「プリキユア」のポストフェミニズム

終章 私たちの現在地

ニヒリズムを超えて

『シン・仮面ライダー』と宗教二世問題

『チェンソーマン』と弱者男性の生きる道

おわりに——正義はどこへ行くのか？——

謝辞

註

本書の第一章から第六章は、ウェブサイト「集英社新書プラス」での連載『現代社会と向き合うためのヒーロー論』（二〇二二年七月一二月）を元に、加筆・修正したものです。なお、序章と第七章以降は本書のための書き下ろしです。

序章 多様性の時代の正義

バイセクシュアルのスーパーマン？

スーパーヒーローたちは、相変わらず元気である。MCU（マーベル・シネマティック・ユニバース）の世界は拡大の一途だし、日本ではウルトラマンや仮面ライダーといった往年のヒーローたちが、装いを新たにスクリーンで躍動している。ヒーローをモチーフにした漫画やアニメ作品も変わらず豊富だ。

だが、それらのヒーローたちが、「多様性」が叫ばれる現在、奇妙な屈折なしでは存在を許されなくなっていることも確かだ。正義と悪の区別に悩むヒーロー、民衆に批判されるヒーロー、年老いていくヒーロー、そしてなんといっても、男らしさ全開では全然説得力を持ちえなくなったヒーロー。

実際、とりわけアメリカのヒーローものでは、「白人・男性・異性愛者・健常者・ミドルクラス」というマジヨリテイ属性のヒーローは保留抜きでは描けなくなっている。例えば、ヒーローと言えばみながまず思いつくであろうスーパーマン。そのスーパーマンがバイセクシュアルであるという設定が物議をかもしたのは記憶に新しい。

そう、あの、白人でマッチョでセクシーで異性愛者のスーパーマンが、バイセクシュア



図1 「スーパーマン：サン・オブ・カル=エル／ザ・トゥルース」(2023年、小学館集英社プロダクション) © & TM DC

ルになったのである。

二〇二一年に出版された「スーパーマン」シリーズの『スーパーマン…カルⅡエルの息子』では、オリジナルのスーパーマンであるクラーク・ケントとロイス・レインとの間の息子ジョン・ケントが新スーパーマンとして活躍するが、その第五巻では、世界のあらゆる人を救おうとしてバーンアウト状態になってしまう。そんなスーパーマンを介抱するの

が、友人で記者の日系男性ジェイ・ナカムラであった。長い眠りから覚めたジョンはジェイとキスをする。新スーパーマンはバイセクシユアルであることが明らかにされたのだ。

作者のトム・テイラーは、「より多くの人が、コミック界で最もパワフルなスーパーヒーローの中に自分を見ることがで

きるようになりました」と述べた。^{*1} 実際、多くのファン（とりわけ同性愛者のファン）は、自分が同一化できるスーパーマンがようやく登場したと喜んだ。

それに対しては、予想されることではあったが、反対の声も起こった。極端で代表的な声は、保守派FOXニュースでの、ジャーナリスト、レイモンド・アローヨのそれだっただろう。彼は「彼らはなぜスーパーヒーローを性的に描写するのか？」と問いかけ、「私はバットマン、スーパーマン、スパイダーマンの申し子でした。そういったヒーローが大好きだった。私たちはヒーローたちに、悪者を捕らえて欲しかっただけであって、性病に捕らわれて欲しかったわけじゃない。私たちの漫画のヒーローには手を出さないでそっとしておいて欲しいね」と述べた。^{*2}

もちろん、スーパーヒーローたちはずっと「性的に描写」されてきた。異性愛者として。スーパーマンの筋肉や性器の形が丸見えのタイトの衣装は、見方によっては性的描写そのものである。アローヨはそのことを無視して、同性にキスした途端にそれが「性的」だと非難したわけである。

このようにどう見てもホモフォビック（同性愛嫌悪的）な意見のほかには、既存のスーパーヒーローの設定を変えるのではなく、同性愛の新しいヒーローを創造すればいいじゃ

ないかという「穏健」な意見もあった。ただ、この事例は、オリジナルのスーパーマンではなく、その息子がバイセクシュアルだと設定されたということで、新しいヒーローが創造されたと言えるのだから、その意見も的外れだとは思うが。

正義はどこへ行く

問題は、多様性の時代に正義はどこへ行ったのか、というふうにとめられるだろう。それに対する一つの簡単な答えは、多様性こそが正義である、というものだ。だが、本書でこの後詳しく論ずるが、そのロジックの先にも袋小路が待ちかまえているだろう。つまり、多様性が正義であるのなら、悪は存在しうるのかという袋小路だ。価値観の多様性を突き詰めると、正義と悪との区別は見失われてしまうのではないか。現在の「多様性とヒーロー」をめぐる問題の本質はそこにありそうだ。

本書では、最初は直接に現在の多様性と正義との関係を問うのではなく、少し時代をさかのぼり、そもそもアメリカ的なヒーロー、アメリカ的な正義とはどのようなものであったかを考察するところから出発したい。少々遠回りに思えるかもしれないが、現代のヒーローたちが直面している正義をめぐるジレンマ——正義の多様化、相対化の果ての無効

化——が、意外と長い歴史を持っていることが分かるだろう。新しい問題は、古い問題の変奏であつたり、古い問題の「型」が新しい時代において別の姿を現したものだとは分かるだろう。そのように理解することは、新しい問題を乗り越えるための重要な方法になるはずだ。

その上で本書の後半では日本に視点を移す。日本のヒーローものを考えるには、アメリカに見出したものをそのまま適用することはできないだろう。だがその一方でグローバルにメディアが共有されている現在においては、アメリカと日本は同じような問題を共有していることもまた明らかになるだろう。

さて、正義とヒーローの探究の旅に、出かけよう。